

自己の効果的・肯定的変化を促すインテリアデザイン手法の構築

Method Development of Interior Design to Encourage Occupants to Make Effective and Positive Changes

松田 奈緒子 (MATSUDA Naoko)

本研究は、住み手が行う「空間の自己化」を手掛かりとして、インテリア空間のデザインをサポートする手法の構築を目指す。

「空間の自己化」とは、住み手がそこに住み始めたときから、自分の生活や感性に相応しい個別の空間に仕立て上げることをいう。この過程でインテリア空間には自己が投影され、逆に、自己化されたインテリア空間に自己は影響されることがわかっている（松田・加藤 2014）。したがって、インテリア空間をある意思・意図をもってデザインすることにより、自己の効果的・肯定的変化を促すことが可能と考える。

本研究では、約 15～20 年を経た自己の変容とインテリア空間の変化を、追跡調査によって明らかにすることを目的とする。

3 年目である本年度は、①約 15 年前に実施した調査の対象者（フランス在住者）を再び対象とした実態調査、②①の調査対象者を対象にインテリア要素の要となる「家具」に対する意識と実態に関する調査、③文化的背景の違いがもたらす影響の分析、の 3 つを試みた。

①について、フランス国立建築大学パリ・ラ・ビレット校を拠点とし、過去の調査対象者（16 名）の現在の居場所の確認を試みたものの、困難を極めた。そこで、同等以上の資料を得るため、フランスにおいて、芸術・文化に造詣が深く、よりセンシティブにインテリア空間への影響が表れやすいと考えられる 16 名を対象に同様の調査を実施した。これらの対象者は、パリ市内・パリ近郊・地方都市に居を構えており、一軒家は 3 軒、集合住宅内は 13 軒であった。年齢は、35 歳から 85 歳と幅広く、それぞれのライフステージにおける自己の変容とインテリア空間の変化の関係性について抽出した。

②については、①の調査対象者 16 名を対象に、現在のインテリア空間における家具が、ご家族から受け継がれたものなのか、ご自身で入手したものなのか、また、将来誰かに譲りたいものなのか、についてその実態と意識を抽出した。彼らにとって家具が、どの様に自己の効果的・肯定的変化を促すインテリアデザイン手法の一つとなっているか、を示唆する資料として有意義であると考えられる。

③は、自己とインテリア空間の関係性について文化比較を行うべく、現地フランスでしか入手できない資料の収集に努めた。具体的には、インテリアデザイナーや建築家によりデザインされた住宅・インテリア空間、および、家族や個人の内面と住まいとの関係性について展示がされている美術館等を調査・見学し、空間を自己化する上での効果的なインテリアデザイン手法について 21 件の資料を入手した。